View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

【講義録】社団法人 茶道裏千家淡交会青年部
池坊短期大学「心ホール」（京都・四条烏丸）
「茶道セミナー」第422回（平成24年11月12日（月））

茶室について
―― 神道と茶の湯 ――

皇學館大学　現代日本社会学部　准教授
（伝統継承・文化創造コース）
岩　崎　正　彌

概　　要

日本の茶の湯の起源については，多くは唐代・陸羽の「茶経」の喫茶の風や，鎌倉期・栄西の禅林儀礼から語られることが多いように思われます．しかし，茶の湯は神道からの大きな影響を受けていると思われますし，むしろ，この国に神道があったゆえに，茶の湯があるのではと．そこで，今日は「神道と茶の湯」の関係に思いをいたしながら，日本の基層文化である神道精神を源流に，和歌の心を経糸に，日本のすべての良きものを集めた精華として，茶の湯という文化が見事に花ひらいたのである，というお話を申し上げたく存じます．

講義内容

ご挨拶

演題について

昨年の夏ごろに主催者さまから「茶室について」という演題でお話をしてほしいということでございました．随分遠大なテーマをいただいたものだなと思っておりましたところ，昨年の秋にはすでにこの演題で広報資料も整っておりました．さて，どのように絞ってお話しをさせていただけたらいいかと考えておりました．そこで，この演題はそのままに，副題として，ここ３～４年ほ

ど考え続けている「神道と茶の湯」というテーマを付け加えさせていただきました.

全国の茶室

ただ今，私は京都工芸線維大学名誉教授の中村昌生先生と，京都建築専門学校の桐浴邦夫先生とご一緒に３人で，全国の茶室を取りまとめたガイドブックを作ろうと準備をいたしております．古典的な茶室を学ぶ教科書としても，茶会のための貸席を探すリストとしても便利な，ハンディタイプなものを目指しております．来年の今頃には完成のご案内ができるかと思います.

茶室・数寄屋建築研究の泰斗でいらっしゃる中村先生の編集方針の下で，只今私が，全国の茶室をリストアップいたしております．その総数は1,000以上となり，その中から特に解説文と写真と図面を添えるべき茶室を約400件ほど選んでいます．この仕事を通じて「茶室とはいかなるものであるのか」という命題を日々考えているところであります.

先日もその編集会議の席で，中村先生が「わたしは茶室の研究をもう五十年以上も続けているが，今もって茶室とは何かというものがはっきりとは分からんのだよ」とおっしゃっていました.「それだけ奥の深いもの」であるのが茶室であります．そう言われますと，わたくしのような未熟な者が，今日のような場所で「茶室について」などという演題でお話しすることは到底合いならぬことでありましょう．それでも，その命題に答えうるガイドブックとなることを，只今私ども一同は目指して編集作業をいたしておるところであります.

茶室は思想

中村先生はまた別の機会にこのようにお話をされていらっしゃいました.「茶室や数寄屋は哲学である．思想である．であるから，目の前にある茶室や数寄屋のそれぞれの細かい寸法を測って，判ったように思ってはいかんのだ．その空間を生み出している哲学，思想を理解しなきゃいかん．だからそこですぐメジャーを持って測っちゃいかん」とういことでございました．中村先生とご一緒のときは，私はなかなかメジャーを出して床回りなどの寸法を測れない

のでございます．（笑い）とはいえ，茶室の設計にあたって寸法にたいへんに厳しいのも中村先生でいらっしゃいます．ですからおそらく「寸法も大事，されどその奥にある思想，哲学が大事である．それをわきまえなければいかん」という意味かと存じております．

それに関連してこのようなお話もしていただいたことがあります．「侘び茶の茶室にはある範囲があって，この範囲の中に入っていれば侘び茶にふさわしい茶室であるが，創意工夫とはいえ，その範囲を外れたものはどうしても侘び茶にふさわしい茶室とは言いがたい．そういう侘び茶の茶室のもつ範囲がある．これはなかなか説明はできないものであるけれども，そういった範囲をわきまえて，古典をよく勉強し，そのよき侘び茶にふさわしい茶室を作らなければいかん」と．わたしもその言葉に従い，よき古典の茶室をたくさん見て，学んで，その精神をよく理解し，その精神を継承する茶室をこれからも作っていきたいと思っております．

そこで今日は，茶室を思想的に理解することへの助けとなるようなお話をさせていただければと存じます．

伊勢との出会

私は，先ほども司会の方からのご紹介がありましたように，それまで17年間暮らしていた京都を離れて，皇學館大学とのご縁により，２年半前（平成20年（2010）春）より本格的に伊勢の地に移り住みました．

（それまでの経歴・経緯・皇學館大学のことについて：省略）

４年半前より皇學館大学の非常勤講師として毎週水曜日に伊勢に通うことになったころ，当時の理事長の上杉千郷さまにお引き合わせいただく機会をいただきました．私が茶室の研究や設計をいたしておりますことをお話いたしましたところ，上杉千郷理事長はたいへん喜ばれて，茶の湯のことで話が弾みました．

上杉理事長の教え

上杉千郷理事長は，大正12年（1923）生まれ（これは裏千家の千玄室大宗匠と同じ生まれです.）しかも，皇學館大學在中に学徒出陣，海軍飛行専修予備生徒となり，沖縄戦に参戦され，九死に一生を得ている．ということは海軍特攻隊員として大宗匠と同期でありました．その後，法務大臣秘書官など，官に進まれたあと，教育界に活躍された方でした．また，長崎市の諏訪大社の宮司さまも勤めていらっしゃいまして，そこにはお茶室もあってお茶をよく嗜まれていらっしゃいました.

理事長は，「わたしは茶道と神道はとても結びつきが深い．神道は茶道の源なのだ」とおっしゃって，論考をまとめられた「茶道と神道」そして「日本文化と神道」いう小冊子をいただきました．その言葉に，その小冊子の内容に，私は深く打たれるものがあり，それまで侘び茶について考えていた事々が氷解するような思いがいたしました．このテーマを引き継がせていただくためにも，この大学とのご縁ができたのだな，とも感じました.

茶道と神道

「茶道と神道」の一節を読ませていただきます.

「茶道といえば，一般的には仏教文化の一環として位置付けられていますが，仏教というフィルターを取り除いたとき，そこに日本固有の神道祭祀を基層とした日本文化そのものが見えてくるのであります．それを一言でいえば，人が人をもてなす茶事は，実は人が神を供応する神事儀礼を最も厳しい形で継承し，体系化した儀礼であるということであります．云いかえれば，茶事は祭礼そのものということが出来ます．私は神に仕える神職として，茶道の振興に力を注ぐことが，神社の心を一人でも多くの人々に理解して貰い，日本の文化の興隆につながることであり，それがご神徳の発揚であると確信いたしております．そういう気持ちで，微力茶道に心がけている次第です」.（「茶道と神道」Ｐ４）

上杉理事長は平成22年（2010）５月にお亡くなりになってしまいましたので，それ以上のご指導をいただくことがもう叶いません．この文章は平成４年（1992）長崎市の諏訪大社における第６回：茶道裏千家淡交会九州区学校茶道

連絡協議会でのご講話でありました.

日本文化と神道

もう１冊の「日本文化と神道」にはこのように書いてあります.

「この茶道文化が今日，日本において占める地位は大きく不動です．茶道が今日，日本の文化として占める全国的な展開をしている背景に，私は神道が茶道儀式と精神面に大きく関わっていることがあると考えます.

茶道点前の中にある神道の一例を挙げれば，神道では，祭に先立って物忌みと潔斎を重ね」，これは「斎(ゆ)まわり，静(せい)まわり」と言います.「身と心を清浄にして神を迎え，祭場に臨むことと同じように，茶道では茶室に入る時，蹲居で手口を清めます．これは，かつて神事の前に海や川に入り，禊(みそぎ)を行うのを形式化したもので，神社には必ず手水舎があることと同じ意味があります.

亭主は茶席ではひたすらに神を斎(いつ)き祭るが如くつつしみ侍しております．わが生涯においてこの人とまみえる機会はこの一度だけと観念し，あたかも貴人即ち神を迎えるようにして客を迎え，わが魂を捧げて供応するのです．これは神祭りの姿勢であり，これが茶道で「一期一会」の精神と言えましょう．神を祀る姿勢も，客をもてなす姿勢も全く同じといえましょう.

千利休は，広間より小間をつくり，四畳半以下の小間に独立機能をもった茶室を考え出しました．しかも，その茶室は丸太造りで草の屋根と簡素清浄な草庵(そうあん)でした．これは，伊勢神宮の建物に代表される神社建築に通ずるものです．また，天皇陛下の一世一代に一度行われる，御即位に際しての大嘗祭(だいじょうさい)の折に使われる，黒木造りと称する皮付きの木のまま建てられる大嘗宮(だいじょうぐう)とも相通ずるものでもあります.

ここには，神社建築に感じる清浄と安らぎと，日本人の感性の根源を見る事ができます．利休のねらいも，まさに神祭る場所として，それにふさわしい究極のもの，それを求めたところが茶室であったといえるでしょう」(「日本文化と神道」P15～P17).

まったくその通りであるなあと感じた次第でございます．それまで伊勢神宮をお参りするたびに私が感じていたことへのひとつの答えを教えていただいたような思いがいたします．このことを，もっともっと探究することが，わたし

が皇學館に参りましたひとつの使命であろうと思い，これまで過ごしてまいりました次第です．

１．神　道

神道は民族のいとなみ

さて，神道とは一体何でありましょうか．これに答えるのは大変難しいことです．私も皇學館大学に参りまして，いささか調べるようになりました．

たとえば，名誉教授の鎌田純一先生（1923～　　）はこのように述べています．

「神道とは日本民族が，その伝統に従ってカミをまつり，それを根本として展開してきた民族の精神的いとなみをいう」（「神道概説」学生社　第２章「神道とは何か」p25）

すなわち日本民族の精神的営みそのものが日本の神道であるということのようでございます．ちなみに鎌田純一先生も千玄室大宗匠と同じく大正12年（1923）のお生まれでいらっしゃいます．

神道は祭祀

つぎに紹介させていただく一文は，京都の八坂神社の宮司を勤められて，現在は大阪の住吉大社の宮司でいらっしゃいます真弓常忠先生の著作「神道祭祀」にある言葉です．なお，真弓宮司も大正12年（1923）のお生まれでいらっしゃいます．

「われわれは，天地間の万物，生きとし生けるものによって生命を維持している．それ故，日本人は山も川も草木もことごとく神とたたえて崇めてきた．われわれにとっては，自然は人間によって征服されるべきものではなく，限りない恩恵をもたらす，生命のおやであり，み祖（おや）の神であった．それが日本民族の信仰の基本である．神道はこのような生命の根源に対する畏敬に発して，敬虔なつつしみの態度を根本に据えて，いのちがあり，そのはらたきのあるところ，そこに神のみたまが宿るとする太古以来の信仰を素朴に承け継いで，「神祭り」の生活の中に道義を打ち樹てようとする精神のいとなみである．何よりも「神祭り ── 祭祀（さいし）」が神道の根本であり，神道は祭祀をもって成立（なりた）つ宗教といえる」

これらの言葉によれば，このお祭り事の儀礼そのものが大変神道にとっては重要であるということです．またここには生きと生けるすべてのものをあがめるときに，それを神と見立ててといいましょうか，神として祭祀を行なうというのが，日本の心であるようです．

皇祖神の神々

神道の理解のもうひとつの入口は，「古事記」「日本書紀」に描かれている神話への理解でありましょう．皆様よくご存知のように，この日本は天之御中主神（あめのみなかぬしのかみ）をはじめとする神々が高天原（たかまがはら）に降りられて，やがて伊耶那岐神（いざなぎのかみ）・伊耶那美神（いざなみのかみ）の二柱（ふたはしら）がお生まれになり，大八洲（おおやしま）の国を生み，それから多くの神々を生み，それから伊耶那岐は伊耶那美を追って黄泉（よみ）の国に行かれ，戻られて禊払（みそぎばら）いをして，さらに天照大御神（あまてらすおほみかみ）さま，須佐之男命（すさのおのみこと）を生れました．天（あま）の岩屋戸（いわやど）の物語や，大国主神（おほくにぬしのかみ）の国譲りの物語，そして天照大御神さまの孫の邇邇芸命（ににぎのみこと）が豊葦原瑞穂（とよあしはらのみずほ）の国を平定し，その三代後の神武天皇がこの国を建国し，「古事記」は推古天皇までの皇統が書かれています．これは国の勅令で作られた歴史書ですので，本来「古事記」「日本書紀」を信じる日本の歴史として，神さま方を祖先とする天皇家が日本を天（あま）の下（した）しろしめしているということを素朴に信じるべき「国史」なのです．

戦後の教育現場では「古事記」「日本書紀」など神話は教えなくなってしまいました．教えたとしても，神話を空想的文学のように教えている先生方も多いように拝察します．この国の建国に関わる神話を真実として信じるということが日本人としてはとても大切であると思うのです．そういった神々の歴史の中でこの国を考えていく必要があろうかと思います．また，このような建国に関わる「この国は天皇の祖先の神々が創りたまいたる国である」という歴史観を踏まえて信仰いたしますのが，正しい日本の神道の姿であろうと思われます．

本居宣長の「直毘の霊（なおび）（みたま）」

京より伊勢へ向かう道の途中に松阪という町がございます．松阪といえば本居宣長の鈴屋でよく知られています．本居宣長は国学者として，「古事記」「日本書紀」「万葉集」「源氏物語」などの研究をし，また国学や神道に関する思想書を残しています．その中でひとつご紹介したいのが，「直毘の霊」という文章です．これは実は「古事記伝」の冒頭の第１章の解説の部分なのですが，大変よくまとまっているので，これを１冊の論考として取り上げられています．この中で注目していただきたい部分を読ませていただきます．

（『直毘霊』を読む ― 二十一世紀に贈る本居宣長の神道論 ― 阪本是丸監修．中村幸弘／西岡和彦 共著）

「１　皇大御国は，かけまくもかしこき神御祖天照大御神皇の御生れ坐せる大御国にして，万づの国に勝れたる所由は，先づここに著し」．

つまりこの日本はかしこくも天照大神さまがお生まれになった国であるので，全ての国に勝って尊いのであるということです．

「９　古の大御世には，道といふ言挙げもさらになかりき．故れ，古語に，葦原の瑞穂の国は，神ながら言挙げせぬ国といへり」．

それで「道」・「言挙げ」・「神ながら」という言葉について注目していただきたいのです．「言挙げ」とは，注に「ことばに出して言いたてることが，「言挙げ」である．（中略）ことばに出すことによって運命が左右されるという言霊の信仰から，いたずらに言挙げすることは慎まれたのである」とありますように，この国ではあまりにも大事なことはあえて言葉に出すことを控えるわけです．

もう少し読み進めてゆきましょう．

「11（中略）　実は道あるが故に道てふ言なく，道てふことなけれど，道ありしなりけり」．

つまり道という道理が，日本には太古から道理があったのですが，そのような言葉などは必要なかったということです．

「12　然るを，やや降りて，書籍といふ物渡り参ゐ来て，其を学び読む事始まりて後，其の国の手風をならひて，やや万づのうへに交へ用ゐらるる御代になりてぞ，大御国の古の大御手風をば，取り別けて神の道とは名づけられたりける．そは，

かの外つ国の道々に紛ふがゆゑに，神といひ，また，かの名を借りて，ここにも道とはいふなりけり」.

「14　青人草の心までぞ，其の意に移りにける．天皇尊の大御心を心とせずして，己々が賢しら心を心とするは，漢意の移れるなり」.

外つ国とは，はっきりどことは書いていませんが，皆様既にお察しのとおり中国などのことでありましょう．日本人は中国より漢字を借りて漢文を扱ってきたので，どうも「漢意」に，あるいは「賢しら心」に染まってきたのであるということです．この「漢意」に染まることを本居宣長は諌めているのです.

「16　そもそも，此の天地の間に，ありとある事は，悉皆に神の御心なる中に」

「23　神祖伊耶那岐の大神・伊耶那美の大神の始め給ひて，世の中にあらゆる事も物も，此の二柱の大神より始まれり.」

「24　天照大御神の受け給ひ，保ち給ひ，伝へ給ふ道なり．故れ，是を以て神の道とは申すぞかし.」

「33　もし強ひて求むとならば，汚き漢籍心を祓ひ清めて，清々しき御国心もて，古典どもをよく学びてよ．然せば，受け行ふべき道なきことは，おのづから知りてむ．其を知るぞ，すなわち神の道を信け行ふにはありける．かかれば，如此まで論ふも，道の意にはあらねども，禍津日の神の御所為，見つつ黙止えあらず，神直毘の神・大直毘の神の御霊賜りて，この禍をもて直さむとぞよ」.

「禍」というのは「悪いこと」です．注の「神直毘の神」の中で次のように説明されています.

「神直毘の神と大直毘の神というのは「二神とも，伊耶那岐命が筑紫日向之橘之小戸阿波岐原で禊祓せられた時に，禍津日神に次いで，生れ給うた神で，禍害を直すことをもって神徳とされる神」です．従って禍神というのは悪さをする神です．そのあとで神直毘の神も生まれたのです．ですから災いを転じて神直毘の威徳をもって，福に転じてゆきましょう，ということです.

神惟の道

本居宣長は，この日本にはそもそも道があり，「神ながら」の道が行なわれていたのに，「汚き漢籍心」が入ってきたので，今後はこれを祓い清めて，清々しい「御国心」をもって直して行こう，災いを転じて福といたしましょう，と主張しているわけです．

本居宣長は国学者として，儒学者と論争をしていました．儒教が興った中国では，王朝が次から次へと臣下によって打ち倒される国ではなかったか．ゆえに孔子は忠義を説くわけです．翻ってこの大和の国は万世一系の天皇のもと，国民はひとつの家族として生きてきたわけです．もともとこの国にはそのような漢字や教えが入ってくる前から忠義があった国なのです．宣長はこの「漢意」を一旦取り去って，それ以前の太古からの日本の心を見よ，その姿が「神ながらの道である」と言っているわけであります．

「神ながらの道」とは，注にもありますように，「神のまま」という意味です．「神惟」「神随」とも書きます．「神として」「神のお心のままに」という意味です．漢字の「惟」は「そのまま」という意味です．すなわち「神道」という言葉と同じ意味の言葉であります．そこでこの後はなるべく私も神道といわずに「神ながらの道」という言葉を使うようにいたしたいと存じます．

２．神ながらの道から茶の湯へ

和歌の道

さて「かむながら」の精神をどのように探っていけばよいでしょうか．どうやって太古の日本の考え方を知ったらいいのでありましょう．私はその手がかりのひとつは和歌の中にあると考えます．この国では日本の言葉の誕生とともに，和歌が生まれ，和歌の中に日本の精神が込められてきた，と考えられているのです．

「古今和歌集」の「仮名序」に，この様に述べられています．

「やまと歌は，人の心を種として，万の言の葉とぞ成れりける．世の中に在る人，事，業，繁きものなれば，心に思ふ事を，見るもの，聞くものに付けて，言ひ出だせるなり．花に鳴く鶯，水に住む蛙の声を聞けば，生きとし生けるもの，いづれか，歌

を詠まざりける．力をも入れずして，天地を動かし，目に見えぬ鬼神をも哀れと思はせ，男女の仲をも和らげ，猛き武人の心をも慰むるは，歌なり」

とあります．

これに続いて，その具体的な展開の歴史が述べられているのですが，注目すべきは，「この歌，天地の開闢初まりける時より，出来にけり」という部分です．すなわち和歌の始まりは「古事記」が語る天地開闢とともに始まるとされているのです．

仮名序では「古事記」で語られている伊耶那岐と伊耶那美の贈答歌をそのはじめの和歌としています．続いて須佐之男命の歌「八雲立つ出雲八重垣妻籠めに八重垣造るその八重垣を」が語られています．「かくてぞ，花を賞で，鳥を羨み，霞を哀れび，露を悲しぶ心，言葉多く，さまざまに成りにける」と書き進められています．

あわれから幽玄へ

これらのことをたよりに，「神ながらの道」の心のありようを和歌に求めてゆくとするならば，既に「あわれ」というものがこの国の神代のころからあったのでありましょう．和歌はそのように「あわれ」を感じるところからはじまり，やがて幽玄，あるいは有情へと深まってゆき，さらには寂び・侘びへと進化してゆくことになるのです．その過程を，いくつかの歌論や随筆の言葉から拾ってみましょう．

平安中期の歌人，藤原公任（966～1041）が「和歌九品」の中で次のように述べています．

「心詞とどこほらずしておもしろき歌を中品上とし，（中略）ことば妙にして，あまりの心さえある歌を上品上とす」と．

「あまりの心」というところが大事であります．言葉以上に有り余る心がある歌が「上の上」である．「余情」ということであります．その例えとして「ほのぼのと　明石の浦の　朝霧に　島かくれゆく　舟をしぞ思う」（古今和歌集：読み人しらず）という歌が挙げられています．ほのぼのと明けてゆく霧の明石の海の，さらに島の陰にその船は隠れていく．このように，ほのかに，はっき

りとは分からない余情のある風情を「幽玄」と申します.

藤原定家（1162～1241）の父にあたる藤原俊成（1114～1204）は「慈鎮和尚自歌合」の中でこのような歌が「幽玄」なる歌であると教えています.

「ただ読みあげたるにも，うち詠めたるにも，なにとなく艶にも幽玄にもきこゆる事有るなるべし．よき歌になりぬれば，その言葉姿の外に景気の添ひたる様なる事の有るにや」.

「景気」というのは，この場合はおそらく「風情」とでも言うべき意味と思われます．言葉の姿の外に「風情」の伴っているような歌がよろしいということです．具体例が挙げられています.「たとへば春の花のあたりに霞のたなびき」，この「霞」のたなびく姿が余情になっていくわけです.「秋の月の前に鹿の声を聞き」，秋の夜に鳴く鹿の声は物悲しいと聞いております.「垣根の梅に春の風のにほひ」，夜にただよう梅の香りに春の近いことを感じることができます.「嶺の紅葉に時雨のうちそそぎなどする様なる事の，泛（うか）びて添えるなり」，初冬の京都では北から押し寄せる雪雲から冷たいにわか雨が降ることがあります．この時雨が山に敷き詰められた枯葉の上に降る音が，また寂しさを深めるのです．このように，目に見えるものよりも，その奥にある風情を幽玄と名づけて，こういう余情をかもし出す美学というものが尊ばれていくわけです.

幽玄から寂びへ

さらに時代は下って，兼好法師（1283～1352）は「徒然草」137段の中でこのように述べています.「花はさかりに，月はくまなきをのみ見るものかは」と．この意味は「桜は満開のときに，月は満月のときだけに見るものでしょうか，いいや，わたしはそうは思いません,」というものです．おそらく桜の花は蕾もよろしいでしょうし，散って風に舞う姿もまたよろしい，月も雲が掛かっていたり，月そのものが欠けていたりするのもよろしい，ということかと存じます．なお,「吉田兼好」とも呼ばれる兼好法師の出身の「吉田家」は吉田神社とつながる家系でありますし，吉田家をさらにたどれば神祇官をつとめていた「卜部氏」に至りますから，この言葉は法師とはいえ「神ながらの道」

に近い家柄の人物ならではの言葉とも思われます．

また，室町も中頃となって，世阿弥の娘婿にあたる金春禅竹（1405～1471）が書き残した「禅鳳雑談」という書に次のような記事があります

「珠光の物語とて　月も雲間のなきは嫌にて　候 」と．「（侘び茶の創始者とされる）珠光が語ったことには，月も雲間の無いのは嫌でありますなあ」と．こうして，幽玄を尊ぶ美意識はさらに深化して，満ちたるものよりもむしろ欠けているもののほうがよろしい，完全でないもののほうがよろしい，というところまでいくわけです．

時は応仁の乱（1467～1477）を経て，かくも華麗であった平安京も焼け野原になってしまうのでありますが，このころに活躍した連歌師の心敬（1406～1475）は「ささめごと」という書に，「昔の歌仙にある人の，「歌をばいかやうに詠むべきものぞ」と尋ねはべれば，「枯れ野のすすき，有明の月」と答えはべり．これは言わぬ所に心をかけ，冷え寂びたるかたを悟り知れりとなり．境に入りはてたる人の句は，この風情のみなるべし」と記しています．

「枯れ野のすすき，有明の月」とは，西行（1118～1190）の「みればげに心もそれに　なりぞゆく　枯れ野のすすき　有明の月」という歌のことであります．心敬よりも約三百年前の時代を生きた西行は，この「寂び」の境地の先駆者であったといえましょう．

寂びから茶の湯へ

この寂びの境地を「遊芸化」していったのが「茶の湯」であったと思われます．先ほど名前の上がった珠光がその創始者と伝えられています．これまでの御殿での書院茶，舶来の唐物道具をつかった唐物茶，その唐物を賭け事の懸賞品にして茶の味を飲み比べる闘茶などに代わって，「茶の湯」は，ほんの四畳半ほどのちいさな空間に亭主がいくばくかの客を招き，その客の前で自らが茶を点る．道具はありあわせの質素なもの．まるで山中に庵を結んで棲む隠遁者の風情を都の中で営むため「市中の山居」とも呼ばれます．貧しい暮らしの姿を借りるため後の世には「侘び茶」ともいわれるものです．「わび」という言葉には「侘び住まひ」など「貧しくて暮らしむきが不如意である」という

意味があります.

この「遊芸」は，京・南都・堺・博多など大都市の商人から，武家・公家などに広がってゆきました．この美意識が様々な階層のひとびとに広く受け入れられたのであります.

３．伊勢と日本文化

伊勢と西行

ところで，ただいま名前の上がった西行（1118～1190）は，伊勢にたいへんゆかりのある歌人であります．西行は佐藤義清という名の北面の武士でしたが，二十三歳で出家し，全国を放浪しました．そして伊勢にも逗留し，庵を構えたようで，二見浦にその跡があります．その後にも諸国を巡り，平泉の奥州藤原家にも二度ほど訪ねています.

西行が伊勢神宮について歌ったとされる次の歌はたいへん有名です.

「何ごとの　おはしますかは　知らねども　かたじけなさに　涙こぼるる」

幽玄・余情を寂びの境地にまで高めた歌人であった西行にとって，伊勢はその求める境地を感得する聖地であったのではないでしょうか．その境地がこの和歌には良く表されていて，ゆえに現代でも「神ながらの道」への崇敬の心を表すのに最もふさわしい和歌とされているのではないでしょうか.

伊勢と荒木田守武

伊勢神宮と和歌といえば，西行から約三百五十年後を生きた荒木田守武（1473～1549）の名が思い起こされます．彼は神宮の神職であり，連歌師であり「俳諧の始祖」ともされています．連歌の発句やひとつひとつの句に着目し，わずか五七五の句型に，深い境地を込めて究極の文学作品に昇華させました．俳諧の創始者が伊勢で神なからの道に仕える者であったことは，日本文学史の中でも象徴的な出来事であったと思われます.

伊勢と松尾芭蕉

また，西行から約五百年後を生きた松尾芭蕉（1644～1694）も伊勢にゆかりの深い人物です．伊賀に生れ，俳諧人となって江戸に行き，「西行のなみだのあとをしたい」て，西行の跡を追って，奥州の奥の細道を歩いた，それが「奥の細道」となったと，聞いております．

芭蕉が神宮で詠んだ俳句が次のように残されています．

「何の木の　花とは知らず　にほひかな」

西行の「何ごとの ――」の歌への芭蕉の返歌のようにも思われます．さすれば「花」の「にほひ」は「かたじけなさに涙こぼるる」ほどにありがたい「神」の臨在を感じ入るよすがでありましょう．故に，この句も「神ながらの道」を表わす大切な句とされているのです．

また，よく引用される芭蕉の言葉で「笈の小文」の中に次のようなものがあります

「西行の和歌に於ける，宗祇の連歌に於ける，雪舟の絵に於ける，利休が茶における其の貫道する物は一なり」

すなわち，西行，宗祇，雪舟，利休が求めている，そしてこれを書いている芭蕉も，求めるものは同じひとつのものである，ということです．同じものを求める人々が伊勢に立ち寄り，伊勢を愛で，おなじく日本の文化を深く考える人間にとって伊勢は聖地であり，求め拠って立つその芸道を，霊力の源を養う，巡礼の地なのではないかと思われます．そしてその求めるひとつの道は，大和の神々が求める「神ながらの道」を源流にあふれ出ずる「道」なのではないでしょうか．

伊勢と和歌・俳句

歌人で國學院大學名誉教授の岡野弘彦先生（1924～　　）は，このような西行や芭蕉の伊勢神宮への和歌や俳句について，次のように述べられていらっしゃいます．

「信仰は神の起源や本質が明らかにならねば始まらないというものではない．ことに日本人は他民族に比べて，自分たちの神を信じるのにことさら，教義を立てて説く

ということはしない傾向があるのだ．だから西行や芭蕉が和歌や俳句の上で短く結集した言葉に深い畏敬の情念の表白が多くの人々にしみじみと染み渡り，身の内から沸き起こるような共感の念を誘う力がある．」（伊勢神宮「神々の物語」淡交社　P7）

わたしたちはこのような短い和歌や俳句の言葉によって，「神（かむ）ながらの道」への信仰を感得するのであります．それが日本の文化の基本的な姿なのです．茶の湯においても，ほのかな，わずかな気配の中に，私たちはその文化の源流である「神（かむ）ながらの道」を感得することができるのであります．

４．茶の湯の中に見る「神（かむ）ながらの道」

このように神道：神（かむ）ながらの道の精神を，和歌の道をたどって，茶の湯へ到る流れを縷々お話して参りました．これからは，一歩すすんで今日の演題であります「神道と茶の湯」としての「茶室について」の物語を，お手元の資料の，「神道」と「茶の湯」の二つのカラー写真を並べたページから感じとっていただきたく存じます．

露　地

露地の入口には結界（けっかい）となる門があり，これは境内に入る鳥居に当たりましょう．結界といえば，さらに外露地（そとろじ）から内露地（うちろじ）へは枝折戸（しおりど）や垣根でめぐらされているのも，境内（けいだい）でいえば幾重にも廻らされた御垣（みかき）・玉垣（たまがき）にあたるものでありましょう．

そもそも，この茶室の周りを囲む常緑の森である露地は．これは神社における鎮守（ちんじゅ）の森に当たりましょう．聖域を守る緑の森の中を，参道のごとく石畳があり，やがて段々と飛び石になっていくのです．

そして，手水舎（てみずしゃ）あるいはいにしえにおいては実際に川に降り立って禊（みそぎ）をした御手洗（みたらい）の場（ば）にあたるのが蹲居（つくばい）です．まさに神社と同じような柄杓（ひしゃく）が用意されており，全く神（かむ）ながらの道と同じ所作で身も心も清めるのです．

露地（ろじ）の腰掛（こしかけ）は，季節の移ろいや鳥のさえずりをしばし愛（め）でて，世のあわれを深く感じ入るための装置でありましょう．と，やがて亭主が蹲居の水を換える

音が聞こえ，やがて枝折戸を開けて客を出迎え，ここでは主客が一礼をする「迎付」となります．ここで主客が言葉を交わさず無言で一礼を交わすのは，まさに祭祀の所作にあたりましょう．

茶　室

草庵茶室の屋根で一番尊ばれる材料は萱でございましょう．萱葺といえば伊勢神宮の正殿をはじめとする諸殿の屋根も萱葺です．神宮の唯一神明造りは太古の米蔵を模したとも言われております．この神殿と茶室の萱葺は，はるか昔からの屋根の姿として同じ精神でつながれているのです．

茶室の床の間には，亭主がその日のもてなしの趣向に心を尽くして，軸物や花を飾り，神聖な空間をつくります．そのことで私が好きな文章が，岡倉天心（1863～1913）の「茶の本」の第６章「花」の中ほどにあります．

「茶の宗匠が花を満足に生けると，彼はそれを日本間の上座にあたる床の間に置く．その効果を妨げるような物はいっさいその近くにおかない．たとえば一幅の絵でも，その配合には何か特殊の審美的理由がなければならぬ．花はそこに王位についた皇子（like an enthroned prince）のように座っている．そして客やお弟子たちは，その室に入るやまずこれに丁寧なおじぎをしてから始めて主人に挨拶をする」

（岩波文庫．訳：村岡　博）（英文は著者が挿入）

私たちは，床の間の花に対して，神の末裔の東宮さまに礼をいたすように接しているのであり，さすれば床の間はさながら神殿における神の座に当たりましょう．

茶室の柱や梁や天井などの木部は，伊勢神宮の御殿のように白木のままです．何も塗ったり，彫ったりせず，そのままの，神のままの風情を大切にしています．

床柱には赤松皮付きの丸太も使います．これは大嘗宮の黒木丸太造に通じるものでありましょう．

茶室の造作で北山杉の磨丸太が尊ばれるのは，その磨丸太の光沢が美しく，また面を取ると木目がまた際立って，その木目に目を凝らせば，年輪の天然の味わいが風情を醸しだすからで，まことに杉というのは茶室にはよく似合う材

料です.

床の間の，床柱の相手柱に「档錆丸太」という材料がよく使われるのはご存知でしょうか．これは錆色の付いた桧の丸太のことです．档とはヒバのことですが，今では桧に錆をつけて作ります．侘びた風情のある材料で，茶室や数寄屋造には欠かせません．これは，銘木屋さんによれば，夏に桧の木を林の中で切って，ざっとそこに一ヶ月ほど立てかけておき，立ち枯れにしておくのだそうです．そうするとバクテリアがその皮の下に繁殖し天然の錆色を付けるのです.

神宮の諸殿も，年月がたってゆきますと，桧の当初の明るい色が落ち着いて，やがて錆びて古色のついた，何とも言えないよい風情になります．この風情を日本人は愛するのだなと思います．その風情を床柱の相方の柱に手間隙かけて人工的に錆丸太というものを作って持ってくるわけです．まさに「寂び」を演出する材料であります.

そのほか，様々な「寂び」にふさわしい材料はなるべく「あるがまま」に，ほんの一手間，二手間，最小限の手間だけをかけて取り扱い，あまり凝ったことをしないのが茶室づくりの作法と思われます.

土壁も，なるべく仕上げ過ぎず，かといってあまり不始末でもいけませず，程よい仕上がりを心がけます．窓も，中国風の丸窓のようなものは侘びの茶室にはあまり見うけられません．丸窓風であったとしても下に敷居を添えて半月盆のように一辺を欠けさせています．正方形も，窓の形や障子の桟には好まれず，ちょっと比率を変えて長方形にすることが多いようです．正円や正方形のような整いすぎた，作為的な造形を避けて，なるべく崩して配置しているのも，「神ながら」に通じる自然な姿を求めてのことではないかと思われます.

点　前

茶の湯の点前に流れる所作の美しさと清らかさ，これはまさに祭祀に通じるものではないかと思われます．きりっとした緊張の中で，清らかさが追求されてゆきます.

また席中での道具の取り合わせ，水差しがあって，茶入，茶碗と，また置き

直してと，あの瞬間に聖なる空間と時間が作られてゆきます．お点前と置合わせは聖なる時間と空間をつくる秘法であります．それがお点前と置合せの本質でありましょう．

茶事では，最初に炭手前で火を起こします．これは神事における忌火にあたる儀式です．懐石料理は，上杉理事長は「神々に神饌を供え，またそれをいただくという」，神と人が共に食べるという儀礼である」とおっしゃっています．特に最初の折敷に盛り付けられた「向付」は，白身魚または貝の刺身または酢の物であることが多く，これこそ「神饌」の鰒や干鯛などに通じるものでありましょう．

この折敷に載る「飯椀」は，神さまから稲穂をいただいた瑞穂の国にふさわしい姿であり，新穀を神にささげ，神とともに食する新嘗祭に通ずるものでありましょう．

白木地の「八寸」の手前左に海の幸，向う右に山の幸が並べられ，青竹の箸が添えられた姿は，なんとも清らかな，太古の姿を思わせます．そしてここで主客の間でなされる「千鳥の盃」の所作は，酒礼，すなわち御神酒による盃事でありましょう．

神宮の神饌では素焼きの土器が使われたり，白木の曲げ物が使われます．茶道具においても，白木の曲物の水指や，（釉薬はかかっていますが）楽茶碗や，竹の茶杓・柄杓・茶筌・花入など，そのままの材料にほんの一手間をかけて使うという道具，神ながらの道に通ずる道具が多く見受けられます．

5．ま と め

日本のあらゆる良きもの

以上，様々に「茶室」「茶の湯」の中に見受けられる「神ながらの道」に通じる精神・美意識を述べさせていただきました．これを説明するのに「和歌の道」の流れもお話させていただきました．「茶室」「茶の湯」の中には，「神ながらの道」を基層とする精神・美意識が流れているのであります．

この日本において，「神ながらの道」を源流として，「和歌の道」をよすがとして，磨き高められていった幽玄・寂びの到達点の遊芸化されたものが「茶の

湯」です．日本のあらゆる良きものを集大成したものが「茶の湯」であります．そのことは，利休の弟子の山上宗二が，「ありとあらゆる遊びに飽きた足利義政公の下問に答えて，同朋衆の能阿弥が，珠光の「御茶の湯」という「面白き遊興」を御紹介申し上げた」という物語に託して語っている中にも伺えます．

茶の湯は「遊芸」であるために，「神道」や「仏教」や「御殿」などと同じ姿であってはならなかったわけでもあります．もし露地の入り口に「鳥居」が付き，茶室の屋根に「千木・鰹木」が載り，あるいは「火頭窓」や「唐破風屋根」があっては，神社や寺院や御殿などと同じとなってしまいます．そこで，茶の湯の世界は，巧妙に浮世の神社や寺院や御殿などの気配を消すように努められています．いわばそれらと距離をとった，簡素なしつらいの，「遊芸」のための架空の世界が演出されているのです．

簡素な架空の空間ゆえに，床の間に仏画を掛けたり，祭りのしつらえをいたしたりすることができるのです．誠に日本の文化の融通無碍なる仕組みがつくられているのです．

世界のあらゆる良きもの

今日は神道の影響について一所懸命に語らさせていただきましたが，古来より日本人は神道ととにありながら，仏教も勉強し，さらに道教も，陰陽道も，儒教も，老荘思想もよく勉強してきたのであります．聖徳太子をはじめとする徳の高い方々から，寺子屋で学ぶ庶民まで．あらゆるよきものを学び，その良きものを日本化しながら吸収してきたのでありました．

茶の湯もそういった意味では，神道に限らず，世界中のよき宗教を集めてここにあったものと思います．ですから，裏千家の皆さまも毎年五月十日にお家元とご一緒に伊勢神宮に献茶をしていただいてますし，神前への献茶式だけでなく，仏前の献茶も，ローマ法王への献茶もぴったりとはまるのは不思議なことであります．どの国の，どの宗教の，ごの神さまにも，「茶の湯」は捧げることができる素晴らしい総合宗教的な力があると思います．

神国日本の茶の湯

その上で，よくよく思い至りますのは，この国の不思議さでございます．この不思議な力をもつ「茶の湯」というものが日本に生まれたその理由は，私はこの国が神の国であるからだと思うわけです．

神さまが作られて，また今日そのままその神々の子孫である天皇陛下をいただいて，国民が家族として仲良く生きている国は，ほかにはどこにもございません．これはもう選ばれた国，特別な国，神々に愛されている国だと思います．でありますからその国に生れたこの「茶の湯」というものには不思議な力があると思うわけです．

この国の不思議さについては，例えばアインシュタイン博士は次のように述べています．

「近代日本の発展ほど世界を驚かせたものはない．一系の天皇を戴いていることが，今日の日本をあらしめたのである．私はこのような尊い国が世界に一ヶ所ぐらいはなくてはならないと考えていた．

世界の未来は進むだけ進み，その間幾度か争いが繰り返されて，最後に闘争につかれる　時が来るだろう．その時人類は必ず真の平和を求めて，世界の盟主をあげなければならぬときが来るに違いない．

その世界の盟主は武力や金力ではなく，あらゆる国の歴史を超越した最も古く，かつ尊い家柄でなくてはならぬ．

世界の文化はアジアに始まってアジアに帰る．それはアジアの高峰・日本に立ち戻らねばならない．

我等は神に感謝する．天が我等人類に日本という尊い国を造っておいてくれたことを」（1923年11月28日来日時の言葉）

ここで，伊勢神宮のＤＶＤのイントロダクションを映写させていただき，皆様とともに神（かむ）なからの道と茶の湯との繋（つなが）りを感得させていただきたいと存じます．

（ＤＶＤ：ナレーション）

伊勢の神宮．古来この聖地に多くの人が言葉では言い表せない何かを感じてきました．今から800年ほど前，西行はこんな歌を残したと伝えられます．

「何ごとの　おわしますかは　知らねども　かたじけなさに　涙こぼるる」

西行は，伊勢の神宮に，窺い知ることのできない尊いものを感じ，涙を流しました.

21世紀の現代においても，西行と似たような感覚と覚える人は少なくありません.

天に向かい真直ぐに伸びる千古の杉，参道を歩く，ただそれだけで心や体が清められていく，そう感じるのは日本人に限ったことではないようです.

世界的に知られたイギリスの歴史学者，アーノルド・Ｊ・トインビー博士（1889～1975）は，伊勢の神宮を訪れ，あらゆる宗教の根底に流れる聖なるものを感じ，神前に額づきました.

世界には，古代に栄えた聖地が数多くありますが，残念ながら，現在，廃墟と化した遺跡も少なくありません．しかし，伊勢の神宮は，今からおよそ2000年前の御鎮座以来，絶えることなく，人々の祈りが捧げられてきました.

実りの秋，神宮の１年の祭典の中で最も神聖で大切なお祭りが始まりました．神嘗祭です．神宮はこのお祭りを中心に１年が営まれています.

神嘗祭は秋に初穂を捧げて，天照大神に感謝するお祭りで，御鎮座以来，2000年間続けられています．初穂には稲の魂，稲魂（いなだま）が宿ると考えられています．神々に感謝の印として神嘗祭では新穀が捧げられます．そして御神威の一層の高まりを祈るのです.

日本人は神々との深いつながりの中で生きてきました．皆さんは伊勢の神宮に何を感じるでしょうか.

（タイトル「伊勢の神宮」が映されたところで，ＤＶＤ終わり）

如何でありましたでしょうか．只今，伊勢神宮は，来年（平成25年（2013））秋の式年遷宮（しきねんせんぐう）を控えて，正殿の隣の御敷地に既に新しい正殿が立ち上がり，順々にほかの別宮などの新しいお社（やしろ）が建てられているとことです．このような形で二千年以上の昔から祈りがそのままの姿で続けられていることは，この国が寄跡の国であることの証拠ではないでしょうか.

日本は世界の宝であるのでして，その国に生まれたこの「茶の湯」というも

のは，あらゆる民族，あらゆる宗教のあらゆる国家の人々に，和みと敬いと清らかさと静けさを与える尊い「道」であります．

千玄室大宗匠も「私の履歴書」で次のように述べていらっしゃいます．

「お茶の世界は不立文字である．言葉ではいくら説明しても伝えられないものがある．それを承知で私が言葉を費やすのも，真の茶道の相（すがた）を布教したいがためである．（中略）　国際化時代といわれながら，あちこちで衝突を繰り返している日本だが，日本という国を他の国より素晴らしいと思うなら，その素晴らしい内容をもっとつくりあげていかねばならない．真実のお茶の心を知っていただくためにも，お茶を見直してと申し上げるのである．」（昭和63年刊）

皆さまもまた，「茶の湯」を通じての，世界の平和をつくる文化大使としての使命を，どうか，より一層大きな心で果たしていただきたいと祈る次第でございます．

また，この国の文化の源に大和の神々のいらっしゃること，大和の神々が見守っていらっしゃることをお考えいただきながら，茶の湯に励んでいただくならば，一層また御神徳の御加護によりまして，よきお茶事ができるのではないかと思います．

皆さまと共に，日本人として，サムライ日本人として，「茶の湯」の意義をまた新たにしていただき，この使命を世界に果たしていきたいと存じます．

わたしも，大和の神々の御神徳にかなった茶室の研究者・設計者として，これからも本当によい茶室をよく学び，よく語り，そしてよく作ってゆき，この国の文化全体の理解者，体現者となっていきたいと思っております．

それでは，拙い話ではございましたが，ますますの茶道の繁栄を共に祈っていきたいと思います．ご清聴を誠にありがとうございました．

会場：（拍手）